

あさかのみや  
**旧朝香宮邸** (東京都庭園美術館)

Former Residence of Prince Asaka  
Tokyo Metropolitan Teien Art Museum

日仏の技術を結集したアール・デコの邸宅

東京都港区の旧朝香宮邸は1933(昭和8年)の竣工。当時、ヨーロッパで流行していたアール・デコの美しさに魅せられた朝香宮夫妻の意思を取り入れ、フランス人室内装飾家、H.ラパンらと宮内省内匠寮によって建てられた。日仏の技術の粋を集めた見事な装飾が特長である。国指定重要文化財。



アール・デコ室内装飾の大御所、ラパンが手がけた大広間。装飾を抑えた空間に、規則正しく並ぶ天井照明が印象的である。垂直・水平線やシンメトリーのアーチなどにもアール・デコの美しさが際立つ



アール・デコで統一された建物として世界的にも貴重な旧朝香宮邸。外観はシンプルだが曲面バルコニーや通風口の意匠に特徴がある



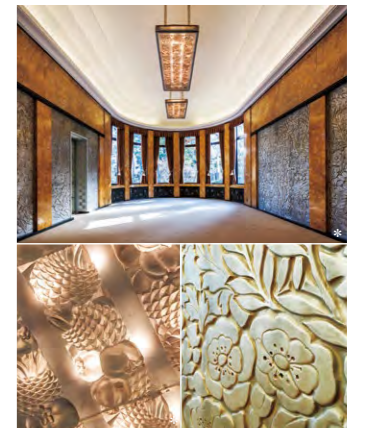
玄関のガラス扉はラリックが朝香宮邸用に作った物。天然石のモザイクの床は宮内省内匠寮の制作でギザギザ模様がモチーフ



仏海軍から贈られた噴水器。来客時、妃殿下が上部の照明に香水を垂らしたと伝わる



大客室。歯車の歯のようなデザインが見られるシャンデリアや幾何学模様の扉に加え、イオニア風の飾りを持つ柱もあり、典型的なアール・デコ様式である



パインアップルとザクロをかたどった照明がある大食堂。植物模様のレリーフが壁を覆う



ステップや手すりに最高級のイタリア産大理石を使用した第一階段



宮内省内匠寮が手がけた2階広間。当時はピアノや蓄音機が置かれ、家族が寛いだ



ドーム型天井と間接照明が特徴の書斎。机の底部は可動式で、回転できる



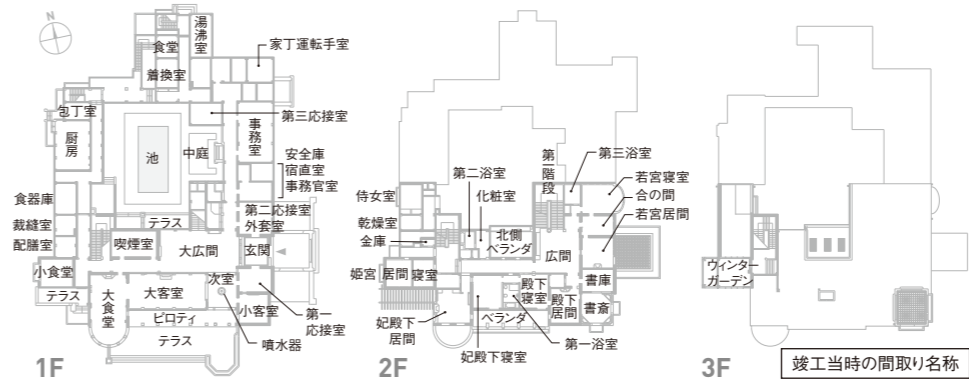
妃殿下の居間(写真上)や寢室の暖房器カバーは妃殿下自身がデザインした

朝香宮鳩彦殿下は1922(大正11)年からのフランス留学中、自動車事故に遭い、療養のためアール・デコ全盛期のパリに允子妃殿下とともに長期滞在した。その間、1925年に開催されたアール・デコ博覧会を見学するなどして、その様式美に感銘を受けたとされる。その後帰国し、関東大震災で倒壊した邸宅に代わる自邸として建設したのがアール・デコで彩られた朝香宮邸である。

1階は宮家や軍関係の来客を迎えた、もてなしの空間。来客が最初に通される大広間や、大客室、大食堂などの内装にはアール・デコ

博覧会で数々のパビリオンをデザインしたラパンを起用した。また、玄関の女性像のガラスレリーフ扉はR.ラリックが、大広間や大食堂のレリーフはI.L.ブランショが制作するなど、そうそうたるフランス人芸術家の作品を配している。大広間の直線を強調したしつらえや整然と並ぶ天井照明はアール・デコの中でも、より近代的なデザインである。ラリック制作のシャンデリアが目を引く大客室にはギザギザ模様、モチーフの繰り返し、古代ギリシャ建築を参考にしたデザインなど、アール・デコ特有の多様な装飾が散りばめられ、邸内で最も華

やかな部屋になっている。2階は寢室や浴室も備えた家族の暮らしの場として設計された。多くを担当した宮内省内匠寮は精鋭の技術者集団。ヨーロッパ視察や建築雑誌を通してアール・デコを学び、最高級の木材や大理石で見事な内装を作り上げたほか、部屋ごとに異なる照明も制作している。後に、邸宅は吉田茂首相兼外相の公邸などとして使用され、現在は美術館になっているが、昭和初期の日本に開花したアール・デコの美しさを今日まで損なうことなく維持しており、貴重である。



用語説明  
 【朝香宮】久邇宮(くにのみや)朝彦親王の第8王子・鳩彦王が1906(明治39)年に創立した宮家  
 【允子妃殿下】明治天皇の第8皇女  
 【アール・デコ】1910~30年代に流行した装飾様式。社会の近代化や工業発展を背景とする幾何学的なデザインが特徴  
 【アール・デコ博覧会】パリ現代装飾美術・産業美術国際博覧会の通称  
 【R.ラリック】アール・デコのガラス工芸家として名をはせた  
 【I.L.ブランショ】フランスの彫刻家、画家。滞仏中の妃殿下に絵画を教えた  
 【宮内省内匠寮】宮内省所管の建物の設計監理を行った部署